

# 信州の生物多様性の価値の共有から保全・活用へ

長野県は、日本の中でも特に生物多様性が豊かであると言われますが、それを具体的に説明しようとするのが難しいのではないのでしょうか。そこで、地域に固有の生物多様性の価値を掘り起こすとともに、危機に直面する現状を科学的な情報として共有し、保全対策や持続可能な活用につなげていくことが重要であると考えています。こうした課題に取り組むために「信州の生物多様性の保全および自然資源の価値共有手法の開発」という研究課題に2017年度から2021年度まで取り組んできました。ここでは、その内容と成果の一部をご紹介します。

## ① 生物多様性ホットスポットの価値を掘り起こし、発信する

生物多様性ホットスポットは、地域に固有な生物の多様性が高いにもかかわらず危機に直面する地域のことです。長野県内でも特に重要なホットスポットとして霧ヶ峰と白馬岳をとりあげ、現況把握や保全策の検討、情報発信に取り組まれました。

霧ヶ峰は火入れや採草によって維持されてきた半自然草原で、その歴史は縄文時代にまでさかのぼることが分かってきました。霧ヶ峰の草原や湿原には、絶滅危惧植物が約70種生育するなど、信州を代表する生物多様性ホットスポットといえます。しかし霧ヶ峰の草原は現在二つの危機に直面しています。一つは火入れや草刈りなど人為的管理がなくなってきたこと、もう一つは過去10年余りの間にニホンジカが急増し、ニッコウキスゲなど多くの植物が食べられてしまったことです。このため多くの電気柵が設置されていますが、その効果を科学的に検証するために調査したところ、柵の中では植物の種数や花の数、花を訪れるチョウなどの昆虫の数が柵の外より多く、生物の多様性が高いことが分かりました。

一方、白馬岳の周辺は本州中部の高山を代表するホットスポットですが、地質の多様性でも知られており、尾根筋に分布する蛇紋岩地や石灰岩地は一般的な植生には乏しい一方で希少な高山植物の生育地となっています。しかし、

ここでもニホンジカが山麓部で分布を広げていることがセンサーカメラによる調査などで明らかとなりました。現在のところ霧ヶ峰のような目立った被害はありませんが、今のうちに対策を打つ必要があり、地域での情報共有と議論が急がれます。

これら霧ヶ峰や白馬岳の情報発信用に新たにウェブサイトを開発しました。これまであまり知られていなかった科学的根拠に基づく自然の価値をわかりやすく発信し、インバウンドを含めたエコツーリズムの促進に寄与することを目指しています。霧ヶ峰のガイドマップも掲載していますので、これを片手にモデルコースを散策してみてください。大草原の自然と歴史へご案内します。



ウェブサイト「信州 山岳高原 生物多様性ホットスポットガイド」長野県環境保全研究所ホームページ <https://www.pref.nagano.lg.jp/kanken/> からリンクしています。



ガイドマップ「霧ヶ峰を歩く」の解説面

## ② 生物文化多様性を保全し、持続可能な地域づくりへ

霧ヶ峰以外にも採草地や雑木林の利用が大きく減少し、田畑の耕作放棄も進むなど里地・里山の環境は大きく変化してきました。里山や草地に特有の動植物が減少し、ニホンジカやイノシシによる農林業や生態系への被害も深刻化しています。それと同時に、身近な生きものと地域文化とのさまざまなつながり（生物文化多様性）も衰退し、絶滅の危機に瀕しています。地域独自の生活様式や信仰、芸術などは、自然とのつながりの中で存在していますので、両者を一体的に保全していくことが重要です。

かつて木曾馬の産地であった開田高原は希少野生動物の宝庫として知られていますが、これには木曾馬飼育ともなう採草地の伝統的な管理が影響していることが最近の研究で分かってきました。現在は採草地としてはほとんど利用されておらず、伝統的な草地の管理は近年大きく衰退しました。このままでは貴重な生物多様性の劣化だけでなく、木曾馬飼育とともに育んできた地域の文化も消滅しないか心配です。

そこで、地元関係者や外部の研究者と協力して、開田高原の自然の価値を発信し、持続可能な地域づくりへ結びつけることを目指した取り組みを始めました。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、現地での活動が思うようにできませんでしたが、伝統的な草地管理や植生、木曾馬の保存、住民意識を調査した結果などをオンライン勉強会で報告し意見交換してきました。今後も生物文化多様性を再生するモデルケースを目指して活動を続けたいと考えています。この取り組みはNPO法人アースウォッチ・ジャパンの支援を受けています。



木曾馬とニゴ（刈った草を積み上げたもの）

## ③ 信州の生物多様性保全が目指す方向は？ 生物多様性地域戦略の改定に向けて

「生物多様性ながの県戦略」は、長野県の生物多様性の現状と課題、それに対する行動計画をまとめた生物多様性地域戦略です。2012年に策定され、この戦略に基づいてさまざまな施策が実施されてきました。時の経過とともに自然や社会の状況も変化し、見直しが必要な時期になりましたので、改めて県内の現状を整理し、新たな戦略の方向性を議論しました。

この議論を進める前段として、保全活動の現状を把握するためにアンケートを実施しました。その結果、外来生物対策は半数の市町村で実施されていますが、希少種対策などはあまり実施されておらず、特に小規模な市町村での人材や予算の不足が課題であることが明らかとなりました。また、会員の高齢化や資金不足などが保全団体に共通した課題である一方、人材育成や外部との連携に対しては前向きな団体も多いことが明らかとなりました。

これらの結果や動植物の状況等も踏まえ、また、国で進められている生物多様性国家戦略の改定議論なども参考に、県戦略改定の論点を整理しました。新しい県戦略は県環境基本計画の中に包含する形で令和4年度中に策定される予定で、県環境審議会で議論が進められています。

(畑中 健一郎/自然環境部)

### 県戦略改定の主な検討ポイント

県内の動向	国内外の動向
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 県版レッドリストの改訂</li> <li>・ 草原や里山の管理放棄への新しい対応</li> <li>・ 北アルプスへのシカによる植生被害防止</li> <li>・ 若年層への体験機会、学習機会の提供</li> <li>・ 連携拡大プラットフォーム形成（市民・企業・市町村等）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Nature based solutions (Nbs) の活用</li> <li>・ 再生可能エネルギーとのトレードオフ回避</li> <li>・ 新枠組による企業活動の活用</li> <li>・ ポスト 2020 生物多様性枠組、新国家戦略への参照</li> <li>・ 30by30、OECM 認定に対応</li> </ul>